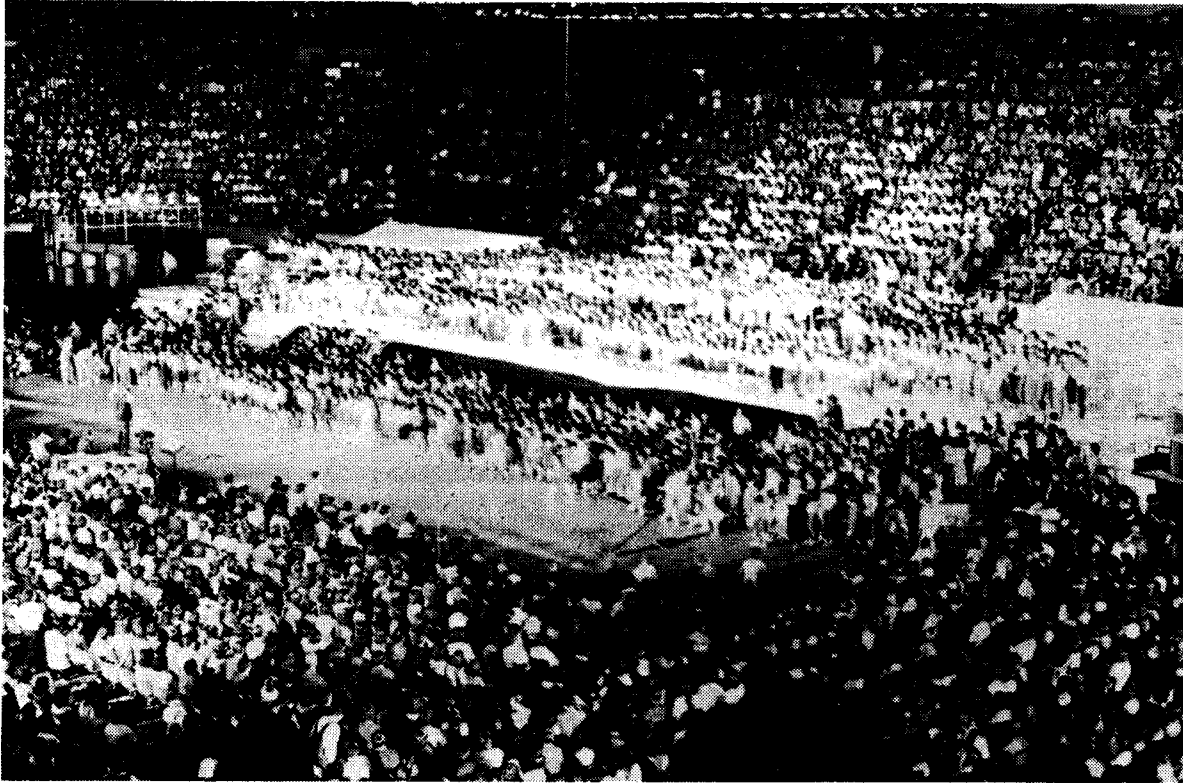


全国祭典

歴史的な1ページしるす



大阪城ホールに18,000名の参加者、7,000人の出演者で開かれた大音楽会 (11月25日)

運動の再高揚へスタート

大音楽会 18000人のべ25000人超え

うたごえ運動としても、また国民的な音楽祭としても歴史的な催しとなった「八四年日本のうたごえ祭典」は十一月二十三日から三日間、大阪城国際文化スポーツホールを主会場に開かれ、大音楽会は一万八千人を越え、のべ二万六千人になりました。

新しい歌づくりや教育と結びついた合唱運動などをくり広げ、国民のための、国民の手による音楽をめぐらしてきたうたごえ運動、一年も前から計画を話し合い、その音楽的な集大成として開かれた「八四年日本のうたごえ祭典」大音楽会は、一九六九年

日二十五日に大阪城ホールで大音楽会に結びつけられました。(関連記事は2頁5面)

埋まり、開演の午後一時には超満員、最後は混雑をきりぎり入場お断りの状況に到りました。

「八四年日本のうたごえ祭典」はのべ二万五千人を越える参加者で運動史上でも、また大衆的な文化運動の点から新しい1ページをしるしました。

「おーい春」「地底のうた」「第九」 外山、中田、井上、辻、高石氏ら専門家も 練習の成果、ハッキリ



会場といっしょにうたい踊るダンシングチーム (大音楽会で)

に日本武道館で大規模に開いて以来、それも当時をよむる参加者一、二万人余で大成功しました。

十一月二十三日から三日間大阪城ホールを中心会場に開かれた「八四年日本のうたごえ祭典」は新しいページをつくる歴史的な音楽祭として成功しました。

みなさん自身が主人公となれる企画を組み、とくくみの過程でも地域住民や労働組合、市民団体の活動に役立ち、力になる運動をすすめてきました。

上げます。しかし、喜ばしい成果と裏腹に長時間、立って聴かなければならなかったことや、折角おいでいただいたのに入場できない事態が生じた。主催者として深くおわび申し上げます。

三千名近くになったへんどもを守る大合同合唱組曲「おーい春」、荒木栄の名曲「地底のうた」などの二部、そして外山雄三指揮、大阪フィルのオーケストラ、井上頼豊、辻久子などの専門家と大合唱「永遠のみどり」「第九」が折り返す三部へとつきました。

「ほんま、きのうのさいてん、えらいごつつかったな」(けしてグリコ・森永の文章ではありません) 祭典翌日の朝八時半、大阪は環状線車中で「偶然」隣り合わせた青年たちの会話である。

前夜(祭典当日)、大音楽会の後片づけや共同デスクの残稿を点検し、ささやかな事務局パーティーが音楽センターで。翌朝には入稿のため新幹線へ乗ったが、その途中のラッシュ時であった。 「偶然」とカッコしたの、それがけして偶然ではないほど祭典参加者が多かったから。大阪だけで一万人を越えたからこんな会話に出会う可能性は高かったのだから。 ☆ 今祭典は何よりも音楽的質の向上がめざされ、リハールも最重視された。 ダンシングのリードボーカルをとった三浦昭悦氏は二十四日に福島で演奏、列車がなくタクシーで東京へ乗りつき四万円余という。 ☆ プロ意識と責任感にただ驚き、その話だけでも感動的だ。しかも早朝に到着してみるとリハールが時間の関係で中止とか。 それでも彼の顔は明るかった。 ☆ 晴れ舞台と大成功の裏に幹事長、事務局長などの指導部とアルバイトだったが泊り込みをつづけた若いスタッフを忘れられない。(末)